

京都市民に 期待すること

～防災の取組は、人としてお互いに
助け合うことから始まる～

防災の取組は、市民一人一人が地震や水害等に関する意識を高め、知識を得て、こうした被害を少しでも軽減できるよう平常時から訓練などの各種の対策を進めておくことが必要であるが、もう一つの大切な取組がある。それは、人として、お互いの存在を認め合い、災害発生時には、各地域や組織等さまざまなかたちで、相互に助け合えるつながりを持つということである。

災害で被害を受けた人がいる時、その人の悲しみ、つらさなどに思いを致し、その中から、何かその人の役に立ちたい、支援の手を差し伸べたいと考え、行動することは、人としてごく当たり前の対応であろう。こうした支援の輪が着実に広がり、地域間、学区間、行政区間、自治体間など多様なレベルで広がっていけば、それは非常に大きな力となる。

京都市においても、仮に花折断層を震源とする地震が発生すれば、甚大な被害が発生する可能性のある京都市東部や北部の市民に対して、被害が比較的少ないとみられる京都市西部の市民が支援することが可能であろうし、榎原～水尾断層を震源とする地震発生の場合は、京都市東部の市民からの支援が期待される。

これは、京都市域外で災害が発生した場合に、その被災地、被災者を京都市や京都市民が支援することと同じであり、こうした互いの助け合いを広げていくことが、防災関係の取組には欠かせない。阪神淡路大震災では、家屋の倒壊により自力で脱出できなかった約3万5千人の市民のうち、消防・警察・自衛隊など公的機関で救助できたのは7,900人だったのに対し、全体の8割近い2万7千人を近隣の住民が助け出している。災害においてバイスタンダーの力、いわゆる「御近所の底力」は、人命救助を専門とする機関よりも、強力であることが証明されている。

また、東日本大震災においても、改めて互助ということの意味、役割等を深く知らされることとなった。「釜石の奇跡」として、同市の小中学生が互いに協力し合いながら高台へ避難し、被害を最小限にとどめたことは、今後に光明と展望を抱くことのできる出来事であった。防災関係施策の一層の充実と併せ、人としてお互いに助け合うことの意味、意義について今一度考えたい。京都市の関係部局が実施している防災に関する講座や各種事業に参加するのも一つのきっかけとなろう。こうしたことから、広がりとお行きを持った防災の取組が着実に進むものと確信する。

